

大雪カントリーサロン

秋

発行・編集／大雪カントリーライフ研究会 2008



移住して来た お隣さん。

西神楽 梅谷 俊一郎

私の最も近いご近所は我が家から一キロ、急坂を降りたところに夏の家を構えている田中さんご夫妻です。田中さんは神奈川県川崎市に住み、主に夏と冬だけこの家を利用されています。こんな「半移住」という考え方もあることをご紹介いたします。田中さんにはメール・インタヴューをさせていただきました。

Q. 北海道を目指したきっかけとは

A. もともと北海道(札幌)に長年住んでいましたが、仕事の都合で生活の拠点は関東になってしまったので、北海道の素晴らしい環境や生活を子供達に教えたかったのがきっかけです。

Q. どうやって住宅を見つけたか?

A. まず、空港から近い場所を条件として不動産業者に見つけてもらいました。いくつか物件を見ましたが、今の家は環境も良く、低価格だったため決めました。

Q. 北海道の生活でどんな点が愉しいですか? 困ったことはありませんか?

A. 普段の関東での生活とまったく違う自然環境の中で過ごせるだけでとてもリフレッシュできます。困ったことは、カラムシ・スズメバチなどの害虫です。

Q. お子さんたちは北海道の生活をどう思っておられますか?

A. 毎年夏と冬に北海道の家で過ごすことを、とても楽しみにしています。関東ではできないことをたくさん体験できるので(夏はキャンプや釣り、冬は雪遊びやスキーなど)北海道は大好きです。

Q. 北海道のご近所とのつきあいはどんな風にしておられますか?

A. 両隣りとも農家のお宅です。引越してきた当初から親切にしてください。

いつも新鮮な野菜などをいただいています。子供同士もとても仲良く(長男同士は同い年です)、一緒に出掛けたり、食事したり家族付き合いをさせていただいています。

Q. 首都圏と比較して旭川はどんなところだと思いますか?

A. 首都圏と比べて、衣食住のバランスがとれた街だと思っています。人ごみが嫌いな私達には関東での余暇はすることがありませんが、北海道ではやりたいことがたくさんあります。

Q. 移住にかかった費用・家の維持費・交通費などについて何かコメントがありますか?

A. 家の維持費は固定資産税がとても安いです。古い家なのでリフォームに費用がかかりました。しかしリフォームもほぼ全て自分でやりましたので思ったほどかかっておりません。リフォーム作業も家族で楽しみました。交通費は、関東の住まいは羽田空港に近く、北海道は旭川空港に近いので飛行機代も時間も少なく大変便利です。

Q. すべてを考え合わせて、こちらに家をお持ちになって良かったと思いますか?

A. とても良かったと思います。これからも北海道の家を大切に維持していきたいと思っています。



歩いてみませんか、石狩川のフットパス

旭川市 白井 暢明

私たち人間は「歩く動物」であり、快適に歩く権利を持っています。しかし、「車社会」を前提にした最近のまちづくりは自動車交通を優先させ、歩行者の権利をほとんど無視し、また奪っています。

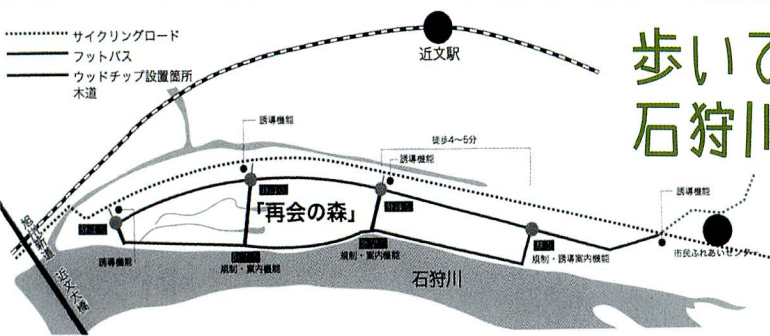
ですから、地球環境の保全や人々の健康増進が叫ばれる中、今後のまちづくりの最重要課題として、私たちが快適に歩くことのできる環境が早急に整備されることが望まれているのです。

このような観点から、私はかねてから、石狩川河畔のウォーキング・コース（サイクリング・ロード）と連結する形で、河畔林の中にフットパス（散策路）をつくることを提案してきました。ついに昨年、近文大橋上流右岸にある河畔林の中に待望のフットパスが整備されました。石狩川とその周囲の美しい風景を眺めながら、豊かな植物や小動物と出会えるこの素晴らしい散策路は「再会の森」と名づけられ、案内版なども設置されて、市民の皆さんに開放されています。

さらに、石狩川と忠別川の合流部（亀吉）の河畔林の中にもフットパスをつくる計画も進んでいます。

そこでこれを機会に、このようなフットパスを大いに利用し、主体的に保存・保守するための市民グループ「旭川フットパス愛好会（歩穂の会）」を昨年10月に設立いたしました。

定期的なウォーキングや野外パーティーの開催、年に1〜2回の草刈作業、再会の森の生物調査とマップづくり、会報の発行などを計画し、今年から活動をはじめています。



すずめと私

東川町 宮地 鎮雄



私は愛知県知多半島の日間賀島という周囲4キロの島で育ちました。北海道の広さに憧れて、大学卒業と同時にまずは札幌で就職。いつかは田舎に住もうと考え、数年後に職業訓練校に入りました。そして家具会社勤務を経て家具職人として独立したのが18年ほど前のことです。東川町に移り住んでもう15年になります。

今は毎日静かな環境で黙々と椅子を作っています。誠実な物作りをしていけば、いい出会いがあります。大雪山の見えるこの地で自分の好きな物づくりをしていると、深い満足感があります。

話は変わりますが、昨年台所から見える松の木にクルミの端材で作った巣箱をかけました。春先にシジュウカラが覗いていたので楽しみにしていたら、なんとスズメが入居。最初はちよつと残念な気がしました。でもこのスズメ夫婦のがんばること、がんばること。多いときには一日三〇〇回も雛に餌を運びます。だんだん子育て中のスズメ夫婦に親しみを感じるようになります。安心して子育てをしないそうです。そういえば、この町も町外や道外から来た人がたくさん住んでいて、そういうところも住みやすい理由かな、と思います。スズメと私、意外と共通点があるような。一つの巣箱には毎年同じスズメが来るそうなので来年も楽しみます。





かぼちゃのはなし。

愛別町 河合 美枝子



プッチーニ・小さな黄色い南瓜。甘くて南瓜の苦手な人でも食べやすいです。そのままの形でオープンなどでお菓子のようなお料理や、挽肉詰めなど食卓での姿も楽しいです。

坊ちゃん・小型で愛らしい南瓜。実はホコホコして硬く、天ぷら、煮物、肉詰めなど、使い勝手の良い南瓜です。少人数の家庭には使いきりサイズでたいへん重宝です。



とっておき・名前の通り、越冬用として春まで保存が可能です。冬至を過ぎると実がオレンジ色になり甘みを増します。まさに、とっておき! サラダ、でんぶん団子、ドーナツ、中でも一番のお勧めはパンキンパイです。

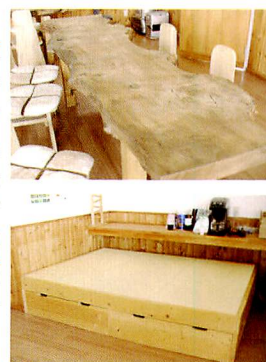


キノコで有名な私のまち愛別町ですが、秋になると越冬の為、多くのお野菜を収穫します。生産者から、冬の栄養源として欠かせない、貴重でおいしい南瓜をご紹介します。皆さんもご存知の通り、南瓜はカロチン豊かで、ビタミン源としてもたいへん価値のあるお野菜です。また、収穫祭などでは、今や無くてはならないパーソナリティーになっていきます。愛別町のラージポンキー南瓜の生産者さんは、町内に赤ちゃんが生まれると、誕生年月日・名前・お祝いの言葉のはいった南瓜をプレゼントしてくれます。農業体験修学旅行の生徒さんとは、ハロウィンの飾りを作ったりして、つかの間の秋を楽しんでいます。「南瓜」といえば、団塊の世代の方々は、おやつや主食代わりにたくさん食べたので、ウンザリという人が多いかもしれません。私の小さい時は、天ぷら、塩煮、でんぶん団子、蒸して干したもので、冬至南瓜ばかりでした。今は南瓜の種類も多く、洋風にも、和風にも食べ方色々です。それぞれの南瓜の種類とお勧めレシピをご紹介します。



オラが進める「地産地消」

西神楽夢民村 島 秀久



▲安心安全の採れたて野菜が並びます。
◀地元で切り出された大木の板材を使ったテーブル。ゴロリと出来る小上がりです。

「地産地消」という言葉がよく使われますが、北海道では実際中々進んでおりません。昔は「地域内自給」が原則だった、農産物の自給率が一九〇%の北海道とはいえ、その全てを地元で消費するのは無理な話ではありません。今は流通が発達し、海外にまで農産物の輸出が始まっていますが、今日では地域で採れたものを買いたいというところと一軒もお店がないのです。私の住む西神楽は一四〇〇世帯ぐらいの地域ですが、農協のスーパーが出来、今は廃業してしまいましたが、昔は魚屋や八百屋、米屋や豆腐やさんがありました。今やそのスーパーですら閉店です。農家は採れたものは全て市場に出荷し、週に一回の朝市だけが、唯一地域の物を買いたい求められる場所になっています。これでは暮らして密着した地産地消にはなりません。まして、車がない人にとっては誠に不便です。そこで、農家自身が運営する直売所を作ることになりました。そうすれば「地域内自給」が現実的なものになり、暮らしの便も増す事でしょう。直売所には、地元で採れた農産物は勿論の事、地元産原料の豆腐や納豆、パンなどの加工品やお婆ちゃん方が作った田舎料理の惣菜などもおきました。お店の場所は、旭川から富良野方面へ通じる、国道二七三号線沿いにあります。花の季節に訪れるたくさんの方の観光客の為の休憩や、地域の人の憩いの場所になるよう、テーブルと小上がりも用意しました。季節ごとの旬の農産物も食べる事が出来、「生産者と消費者の交流の場」ともなる、そんなファーマーズマーケットになる事を夢見て、農業に精を出しているところです。



大雪カントリーサロンと横浜

横浜市 小郷 武雄

大雪カントリーサロンとのお付き合いは、昨年私の元の会社の同僚がYさんを紹介してくれたことから始まった。私はある電機メーカーで長年コンピュータソフトの開発に携わっていたが、定年退職後は都会住民と田舎(和歌山県の熊野古道エリア)をもっと顔が見える形で繋ぐことで地方の活性化の役に立てないかと考えていた。そこで、都会のコミュニティの場としての商店街を通じて都市住民とかかわる為に、二年前に田舎の新聞社と共に小さな会社を横浜に興していた。そしてYさんにお会いして、大雪CSとのお付き合いが始まった。そこで今年の三月に横浜の青葉台商店街の一角で、「大雪山系の田舎暮らし・旬彩試食会」と称して青葉台の奥の方約二十人に対して試食会を開催させて戴いた。大雪山系の旬の物産と大雪CSの皆さん方の温かみが非常に好評であった。これは単に物産を販売するというのではなく、旬の物産を味わっていただく事を通して大雪の自然、暮らし、文化を知って戴き、交流に繋げようとする事である。続いて五月には大雪CSの月例会にご招待戴いた。これは私にとって、大雪CSメンバーの方々の「大自然に溶け込んだ、都会にはない暮らし」を強く印象づけるものであった。その後六月には、私の田舎の同級生達が稲葉農園、上村農園さんを訪問しアスパラ収穫体験をしたが、これは一種の交流の始まりとも言えると思う。今後はこの関係を一層拡大し、「旬彩から交流へ」と発展させると共に、和歌山も含めた「トライアングルな交流」が創出できれば素晴らしいことだと考えている。時季が来れば旬のものをいただき、思い出せば時に訪問をして語り合い、ひいては二地域居住へと繋がってゆくというの、定年後の至上の生き方ではないだろうか。



大地の恵みの試食会をおえて

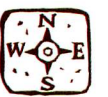
西神楽 上村 美智子

横浜は、さくら満開の三月二十八日「北海道、大雪の恵みの試食会」が開かれました。残雪の旭川から参じた当方、大雪カントリーライフの研究会のスタッフ三人の胸も満開です。はじめての試みで予想つかない点が色々ある中で試食会でしたが、青葉台で迎えて下さった皆様の温かい雰囲気のおかげで和気あいあいと進行いたしました。限られた時間の中で数多い産物を、ただご賞味いただくだけでなく、親しく交わり楽しく時を共有する事が後につながると心構えての実践でした。「暮らしの場が異なる事で、メニューが変わる」に会話が盛り上がり、話題は四方に発展！青葉台の皆様が北海道の食材や農産物に深い関心を寄せ、安心安全な農産物を求めている事がよく伝わってまいりました。旭川に戻ってからの報告会の席上では「大変な事や戸惑いもあったと思うが、三人の感想を聞く限り、青葉台での試食会をやってよかったですと見て取れる」といったご意見をいただきました。その通り！がんばった甲斐があったというものです。そののち試食会が縁で、青葉台スタッフのお知り合いの方々が北海道巡りの旅行の途中、私の農園にも立ち寄り寄って下さいました。このような交流が今後も続くならば本当に嬉しい事です。



生きる事は、食べる事から始まります。健康も充実も食料が元です。都会の人たちが口に入れるものに高い関心を抱きはじめて今こそ、北海道の恵みが活かされる気がいたします。

編集後記



北海道での暮らしぶりを伝えましよう、会のメンバーで記事や写真を持ち寄りながら作ってきた機関紙ですが、皆さんの協力もあってどうとう5号の発行となりました。春夏秋冬と季節を一巡りです。創刊号から通して読むと豊かな自然と美しい四季を友に、アウトドア、山菜、花、家庭菜園、近郊で生産される豊かな農産物の話題、田舎暮らしなど、北海道、ここ大雪山近郊での暮らしのイメージが浮かんできます。カントリーライフ研究会の活動も、いよいよサロンを出て首都圏との交流が始まりました。普段の生活で見慣れてしまっているこの地の魅力と可能性を再び見いだすきっかけとなる事でしょう。(村上)



季刊 大雪カントリーサロン
秋号
平成 20 年 8 月 25 日発行

発行元・編集 / 大雪カントリーライフ研究会
事務局 / 〒078-8232 旭川市豊岡2条3丁目4-1
長谷川 寛治 : kanji@potato.hokkai.net